



TITLE:

錢大昕と『乾隆鄞縣志』

AUTHOR(S):

稲葉, 一郎

CITATION:

稲葉, 一郎. 錢大昕と『乾隆鄞縣志』. 東洋史研究 2004, 63(2): 331-359

ISSUE DATE:

2004-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/138130>

RIGHT:

錢大昕と『乾隆鄞縣志』

稻 葉 一 郎

はじめに

- 一 錢大昕の地方志研究
- 二 地方志編修の立場
- 三 『鄞縣志』の編修
- 四 同時代批判
- 餘 論——『鄞縣志』と『長興縣志』と——

はじめに

清朝一代は地方志編修の全盛期とされ、數量の巨大、種類の多様、體例の完備、内容の廣汎のいずれの面においても未曾有の局面を現出したとされる。政治の安定、經濟の發展にともなう文化の繁榮がその背景にあることは贅言するまでもないが、清朝獨自の政治的背景としては康熙十一年、『大清一統志』編纂の據り所として各省に通志を編修すべきことが命ぜられ、また府・州・縣志は六十年毎に改修すべきものとされたことが挙げられる。⁽¹⁾とくに注目すべきは文字の獄に象徴される精神的抑壓が學者、とくに歴史學者たちに私家の修史を敬遠させ、その關心を地方志編修に轉換させたことである。⁽²⁾地方志の多くが學者知識人によって編修された事情の一半もそこにある。清代には、制度史や考證を除き、歴史敘述が少なく、地方志が壓倒的に多いのもこの點から説明されよう。

ところで錢大昕は、一般には『廿二史考異』（以下『考異』と略稱）や『十駕齋養新錄』（以下『養新錄』と略稱）の撰者、清代の歴史考證學者の最高峰として高く評價されているが、しかし彼の歴史敘述『元史稿』が未完成におわたったこともあって、⁽³⁾歴史家としては必ずしも正當な評價を受けてはいないように思われる。彼の歴史家としての力量をはかるとすれば、遺された二種の地方志が数少ない手がかりになるのではないだろうか。ちなみに中國で編修された六千七百種におよぶ地方志は地誌的な地方志と歴史敘述的な地方志に大別され、その内容や編修方法に大きな差異があるが、錢大昕は地方志を歴史敘述の一ジャンルとして位置づけていた（後述）から、彼の著した地方志の検討を通して彼の歴史敘述の在り方を考察することは彼の敘述の趣旨に適ったものとなるのではないだろうか。

具體的な考察に入るに先立って錢大昕自編の『錢竹汀居士年譜』および曾孫の錢慶曾の作成した續編『錢竹汀先生行述』をもとに彼の生涯とその地方志編修について一瞥しておこう。

錢大昕は雍正六（一七二八）年、江蘇嘉定縣（現上海市嘉定區）に錢桂發（母、沈組佩）の長子として生まれた。十七・八歳頃には『資治通鑑』や二十一史などに親しんだことが知られる。しかし二十歳と二十三歳のとき、鄉試に失敗。その後、紫陽書院（蘇州）で學習。王峻（良齋）や沈德潛に師事した。乾隆十六年、二十四歳のとき、偶々南巡で訪れた乾隆帝に賦を献上して御意にかない、舉人の資格を與えられ内閣中書の職を得る。十九年、二十七歳のとき、進士に及第して翰林院庶吉士となり、その後は文筆を以て皇帝に仕えていたが、乾隆三十九年、四十七歳、詹事府少詹事より廣東學政に轉出。翌四十年、父の死去により在任僅か半年で廣東學政の職を去り歸郷。以後、郷里の近くで鍾山書院（南京、乾隆四十三・四十六）や婁東書院（松江、乾隆五十・五十三）、紫陽書院（蘇州、乾隆五十三・嘉慶九）の院長や主講として教育と研究、著述に従事することになる。

若年の頃の彼の本領は詩文にあったが、紫陽書院で先輩の惠棟らから文字音韻學の手ほどきを受け、北京に出てからは曆學・天文學などに親しみ、金石學にも關心を深め、しだいに歴史考證學に進んだものと見られる。⁽⁴⁾ちなみに『考異』は

まだ官途にあった乾隆三十二年、四十歳のときに着手、引退後の四十七年、五十五歳のときに完成。『養新録』は嘉慶四年、晩年の七十二歳のときに編定、死の前年、嘉慶八年、七十七歳のときに刊行されている。

地方志に關しては、最初に手がけたのは『熱河志』八〇卷である。乾隆二十一年、汪由敦・裘修・董邦達らの下で、紀昀とともに編修に従事し、同年、これを完成している。『熱河志』は大昕二十九歳、庶吉士となつて二年目のことであるから、官僚としても學者としても、まだ駆け出しの頃の仕事であり、恐らく舊來の地方志の編修法を踏襲して作成したものであると思われる。『熱河志』八〇卷は四六年の和珅・梁國治『欽定熱河志』一二〇卷に吸収されたらしく、中國にも傳存していないが、その綱目は年譜に見えているので大凡その構成は推測できる。

地方志の第二作は『鄞縣志』三〇卷である。乾隆五十二年、官界を退いて書院での教育に従事していた時、知人で鄞縣知事の錢維喬の依頼を受けて編修にたずさわり、その翌年にこれを完成している。大昕六十歳、五年前に『考異』を完成。歴史學の方法論を確立し、圓熟した力量を傾注して作成したものであることが知られる。

地方志第三作は『長興縣志』二八卷である。『鄞縣志』編修から十四年後、嘉慶七年、長興縣知事邢澍が錢大昕を招き、編修を依頼したことから舊志の檢討と新志の體例づくりに入り、面目を一新した骨組みはできたが、完成するに至らずして、弟の大昭に引き繼がれ、九（一八〇四）年脱稿、十年に刊行された。⁽⁶⁾

年譜から錢大昕の地方志の取り組みについて、大略、上のようなことがうかがえる。

一 錢大昕の地方志研究

地方志の編修は宋代から盛んになり、元をへて明代には著録されたものだけでも一千種に達し、清代には五千七百種こえるものが著された。⁽⁷⁾清代に地方志編修がとくに盛んになった背景には康熙帝の『大清一統志』編修への強い要請があったことを銘記すべきであろう。

康熙十一年（一六七二）年、保和殿大學士衛周祚の提案により『河南通志』・『陝西通志』をモデルに各省に通志を、翰林院には一統志を編修すべく督勵していたが、三藩の亂の平定と臺灣の併合をうけて、康熙二十二年（一六八三）年、改めて禮部に命じ、通志に關しては三箇月を限つて完成するよう督促した。清代の地方志編修はこれを契機に各地で進められることになる。一統志に關しては康熙二十五年に一統志館を開設、陳廷啓・徐乾學を總裁として編修にかかったが、康熙年間には完成せず、雍正をへて乾隆八（一七四三）年によりやく完成。第二次一統志は乾隆二十九（一七六四）年に開始、四十（一七八四）年に完成した。第三次一統志は嘉慶十六（一八一〇）年、重修に着手、道光二十二年（一八四二）年に完成している。この百六十年に及ぶ『大清一統志』の繼續的編修の過程において皇帝自らが草稿を閲覽して改修意見を提出したり、それに對して總裁官が歷代地理志と唐宋以來の輿地志の體例を検討して凡例二十一條を答申したこともあり、詳細な項目を立てて地方の實情を記録すること、州縣志を六十年ごとに改修するなどのことが制度化され、各地で地方志を編修することがいわば恆常化するまでになっていた。

『潛研堂文集』（以下『文集』と略稱）を瞥見すると、錢大昕は地方志に關する多數の文章を書いていることがわかる。序文としては「鳳陽縣志序」（『文集』卷二四）、跋文としては「跋乾道四明圖經」、「跋新安志」、「跋三山志」、「跋吳郡志」、「跋雲間志」、「跋會稽志」、「跋剡錄」、「跋寶慶四明志」、「跋開慶四明續志」、「跋景定建康志」、「跋咸淳毘陵志」、「跋至元嘉禾志」、「跋齊乘」、「跋楊諱崑山郡志」、「跋玉峯志」、「跋成化四明郡志」、「題韓浚嘉定縣志後」（『文集』卷二九）、書簡としては「與徐仲圃書」、「與姚姬傳書」、「與孫鳳陽書」、「鄞縣志局與同事書」、「與洪稚存書」（『文集』卷三五）などが見える。序や跋として書いたもののほかにも、例えば『鄞縣志』や『長興縣志』の凡例に宋代以來の地方志のことに言及しているから、彼がさらに多くの地方志を讀破し研究していたことが知られる。このことは古典とされる方志を丹念に検討・吟味し、それらの方法論を彼なりに批判的に攝取していたことをうかがわせる。

これらの文章を通して知りうることは「鳳陽縣志序」を除き、その殆どが何らかの形で考證に關するものであり、地

方志の記事を根據に正史などの記載の誤謬を正していることである。彼が讀んだ地方志はもっと多數に上ったはずだが、何らかの考證に利用できなかった地方志はここにはとりあげられていないのである。

錢大昕は『熱河志』の編修以後、改めて多數の地方志を積極的に讀破してその理想像を模索し、地方志の古典とされるものの中から理想のモデルを確立していたように思われる。『鄞縣志』凡例（以下、『乾隆鄞縣志』に關しては卷數と篇名のみ揭示）には、

宋の乾道新安志・嘉泰會稽志・景定建康志・咸淳臨安志、皆な詳贍にして法あり。其の一邑を紀す者、高似孫の剡錄、楊潛の雲間志の若き、亦た皆な文質彬彬、一方の文獻に備うるに足る。（中略）四明の文獻、兩浙に甲たり。若し網羅太だ廣ければ、恐くは卷帙紛繁にして、又た疥駱駝の誚あらん。博觀約取、此の中に頗る苦心あり。

といい、羅願『乾道（淳熙？）新安志』や沈作賓『嘉泰會稽志』、周應合『景定建康志』、潛說友『咸淳臨安志』、高似孫『剡錄』、楊潛『雲間志』など、宋代地方志の古典を高く評價していたことが知られる。

ところで彼が編修に取りかかるまで、鄞縣に關わる地方志としてはどのようなものが編修されていたのだろうか。主として『舊志源流』（卷三〇）および洪煥椿『浙江方志考』（前掲）に見える記事をもとに過去の地方志を列擧すると、

（宋）▽撰人不詳『四明圖志』、▽撰人不詳『景德明州圖經』、▽李茂誠『大觀明州圖經』、▽張津『乾道四明圖經』一二卷、▽胡桀（羅潛修）『寶慶四明志』一二卷、▽吳潛（梅應發修）『開慶四明續志』一二卷。

（元）▽馮福京『大德昌國圖志』七卷、▽袁桷『延祐四明志』二〇卷、▽王元恭『至正四明續志』一二卷。

（明）▽撰人不詳『洪武明州府志』、▽紀宗德・李孝謙『永樂寧波府志』未刊、▽撰人不詳『永樂鄞縣志』未刊、▽黃潤玉『寧波府簡要志』五卷、▽楊寔『成化四明郡志』一〇卷、▽戴鯨『四明志微』二六卷、▽張時徹『嘉靖寧波府志』四二卷。

（清）▽朱士傑（沈增修）『鄞縣志』二〇卷、康熙十一年、▽邱業（萬斯選等修）『寧波府志』三〇卷、康熙十二年、未刊、

▽汪源澤（聞性道修）『鄞縣志』二四卷、康熙二十二年、▽李廷機（左臣黃等修）『寧波府志』二五卷、康熙二十二年、
 ▽曹秉仁（萬經修）『寧波府志』三六卷、雍正八年、▽包旭章『四明志補』鈔本、乾隆十一年、▽錢維喬（錢大昕修）
 『鄞縣志』三〇卷、乾隆五十二年、▽蔣學鏞『鄞志稿』二〇卷、乾隆間。
 となる。

參考までに錢大昕『鄞縣志』の後に編修されたものをも列挙すると、

（清）▽周道遵『鄞縣志』三二卷、咸豐六年、▽張恕『鄞縣志』七五卷、光緒三年。
 となる。

この一覽を見ると、四明、鄞縣あるいは寧波府に關する地方志編修の歴史は古く、錢氏のもものが編修される以前に二種二種類もの地方志が編修されていたことになる。清朝になってからでも六種類もの地方志がつくられている。

しかし『寧波府志』は雍正年間に編修されたものの、『鄞縣志』に關しては康熙二十二年、知縣汪源澤のもとで聞性道が編修して以來、百年間、續修のことがなく、六十年に一度、改修すべしとする地方志編修の規程に背く狀況に陥っていた。⁽⁹⁾このような狀況の中で赴任した知縣錢維喬は、着任後、數年で政治を整え民心を把握すると、早速、『鄞縣志』の編修に向けて準備を始めた。

乃ち邑中の士大夫と縣志を修むるを議し、案牘を鉤稽し、經費を籌畫し、發凡起例、既に詳に且つ慎なり。（印憲會序）

彼は新地方志の編修にむけて史料を整備しただけでなく、經費をも組んで財政的措置を講じ、編修の主幹を委嘱するまでになっていた。⁽¹⁰⁾かくて編修主幹として白羽の矢を立てられたのが（婁東書院長）錢大昕である。

鄞縣を含む四明の地は、國際貿易港寧波を擁して活氣があり、加えて天下にその名を知られた藏書家范氏天一閣、盧址の抱經樓などもあり、⁽¹¹⁾「四明の文獻、兩浙に甲たり」とされるほど文獻資料の充實で知られ、文運の盛んな土地柄であ

ったから、錢大昕には魅力溢れる仕事であったと思われる。二年前の乾隆五十年、知己の錢維喬に招かれて鄞縣の天章寺・阿育王寺に遊んだ¹²錢大昕が、彼の依頼を快諾し、積極的にこれに取り組んだのも肯ける。

ところで錢維喬の指示ですでに史料が整備されていたにしても、百年の空白を埋めるには過去の『鄞縣志』をどう繼承していくかを検討する必要がある。こうした必要から錢大昕がもっぱら重點的に吟味・検討の対象とすることになったのは康熙年間に聞性道によって著された『鄞縣志』である。

聞性道は字を天廼といい、明末清初の動亂を體驗し、明の遺民の立場を守って清朝に仕えず、最後は兄性善とともに隱棲して生を終えた人だが、郷土の歴史に詳しく地方志の編修の要請には積極的にこたえ¹³、内容の一層の充實を期して編修に取り組んだものらしい。聞性道の方志編修については、

性道、郷邦の文獻に留心すること四十載、其の博稽確訂を敬延して、新に一十二攷を定む。(卷三〇舊志源流)

とあるように、多年の採訪と苦心の校訂を経て十二門二四卷にその成果をまとめたものである。¹⁴しかし多方面の史料を網羅的に収集したものの、彼の編修した地方志には大きな缺陷があった。その一は地方志としての體例が整備されていないこと、他は、まだ考證學の發達していなかった時代性を反映して、無批判に多數の記事史料を收録したことである。錢大昕が編修した『鄞縣志』の特徴の一つは、志の本文はすべて舊史・地理書・文集などの史料の纂輯から成り、記事の一條ごとに克明に典據を注記していることであるが、それらの注記を瞥見すれば、聞志から採録した記事の極めて多いことが聞志の記述内容の充實ぶりをうかがわせる。考證學全盛の風潮のなかで研鑽に没頭し、『考異』百卷にその成果をまとめた錢大昕の文獻史料に對する鑑識眼と多數の地方志の研究から修得した彼の地方志論からすれば、聞志は多くの問題をかかえた恰好の批判對象であつたろう。されば、

(乾隆中)錢詹事竹汀、來りて鄞志を修むるや、始めて舊志の例を變じ、備注の引く所、以て徵あるを示す。(『光緒鄞縣志』張恕序)

とて、大膽に編修方針や構成に變更を加え、個々の記事を吟味の上、それぞれに典據を明記することとなった。彼はその改修について、

鄧志、康熙二十五年、聞貢士性道の修葺してより今にいたる迄、已に百載に及ぶ。遺聞舊事、漸く放佚に就く。茲に博く載籍を稽え、參ずるに采訪を以てす。賦役・營伍は諸を吏牘に徴し、人物・事蹟は諸を郷評に覈せば、前志の遺文を補いて一方の徵信となすべに庶し。(凡例)

という。聞志の後、百年の遺文舊事を網羅するとともに、前志の缺を補い錯誤を去って信憑性のあるものとした。單に百年の空白を埋めるだけでなく、前志の不備をも修訂する、というのが錢大昕の目標であつたことが看取される。

二 地方志編修の立場

錢大昕は、上述のように、多數の地方志を研究した上で地方志の編修にとりかかったが、こうした過去の地方志の研究は彼の地方志の在り方を方向づけた。彼は地方志を「一方の徵信」(凡例)とし、國史の一部を構成すべき地方(史)の史料と位置づけている。⁽¹⁵⁾

志の言たる、識なり。周禮、小史は邦國の志を掌り、訓方氏は四方の政事と上下の志を道くを掌り、誦訓は方志を道きて以て觀事を詔ぐを掌る、とあるは、其れ志の權輿か。(鳳陽縣志序)『文集』卷二四

とて、『周禮』を引用しながら方志の位置づけを試み、志は識、すなわち地方の事情を中央に傳達して全體史の史料の一部となすべきものとしている。彼は過去の事例より國史・正史の編修に際し、史料が缺如している場合には、地方志の記載がその缺を補い得ることを知っていたから、地方志の記載と國史の密接な關わりを再確認し、それを根據に獨自の地方志史料論を展開しているのである。⁽¹⁶⁾

錢大昕によれば、方志は一應、府・州・縣ごとに獨立に編修されるものだが、しかし究極的には國史という全體史の一

部を構成すべく、その史料集ともなりうるものであった。そのことについて、

地志の佳なる者は、其の能く舊史の拾遺たるを以てなり。況や南宋一百五十年中の事、史冊斷爛すれば、尤も當に舊聞を博採し以て後學をして考據する所あらしむべきものにおいておや。(卷二七雜識三)

郡縣志も亦た史の流別なり。郷の先輩の著述に傳わるあり傳わらざるあり。而るに名目、猶お學士大夫の口にあれば、彙めて之を列し、以て國史の采擇に備えん。庸ぞ略すべけんや。(『長興縣志』卷二五藝文序)

という。とくに後者に「郡縣志もまた史の流別なり」という言葉は、彼が方志を歴史敘述の一ジャンルと考えていたことを示し、また前者に「舊史の拾遺たり」とは、上述の『宋史』の編修に際して『至正四明續志』が史料を提供した事實をふまえ、國史の遺漏を補う史料として位置づけていたことを物語るものである。いずれも舊聞を博採し、國史の采擇に備えることを目的としていることがわかる。

錢大昕はこうした史料性を重視した結果として、地方志記事の國史への轉用を圓滑ならしむべく、地方志編修の原則を考察したのである。そのまとめともいべきものが『鄞縣志』凡例として卷頭に掲げられているが、ここでは地方志に登載すべきものを集めた「雜識一」(卷二六)の記事を見よう。

予の志乗を修むるや、載籍を涉獵すること多し。其の事の一方に關わるものを選び別ちて四類となし、統て雜識を以て名づく。一は紀事と曰い、皆な史傳の載せる所の軍國政事なり。一は祥異と曰い、則ち史家五行志の例に取る。一は文獻と曰い、則ち先正の遺言軼事の、列傳の盡くは書せざる所のものなり。一は叢談と曰い、則ち稗官小説の類なり。大を識し小を識し、分別部居し、竊かに雜えて越えざるの意に取る。

と。これによれば、一鄞縣地方では周知のものでも、中央では聞知されない事柄を取り上げ紹介しようとする。中央では知られてはいないが、歴史の大局を理解する上で無視できない事象も多い。そうした歴史敘述の内實を豊富にする事象を保存することを目標に編修しているのである。たとえば「雜識一」には元末明初の群雄の一人、方國珍について劉仁本

『慶元路儒學興修記』を引き、

元順帝至正十八年、方國珍領節鉞、來鎮四明。

と記し、その條下に、

案ずるに、(方) 國珍の慶元に據ること、元明二史に明文なし。故に此に據りて之を補う。

という。瑣末な記録によつて正史の缺を補おうとしているのである。この記述を見れば、將來の國史なり一統志の編修に史料を提供しようとの意氣ごみで編修したことが理解されよう。このような「雜識」篇の議論を見ると、彼は地方志を國史の單なる史料に過ぎないものとは見ていなかったことが分かる。

抑も彼にあつては、地方志が國史の記事を提供することになる以上、地方志も國史と共通の内實を分有しなければならぬのである。先の「鳳陽縣志序」の「志之爲言、識也」をうけて、

志は大小を論ずるなく、皆な道の在る所にして、孔子の學んで師とする所なり。(中略) 一州一縣に至るまで、亦た各々志あるは、此れ即ち誦訓の、方志を道く、の遺意なり。

というのなどは、彼の地方志觀の根幹にかかわるものである。錢大昕は歴史事象の中に道を見、それを志のなかに開示したのである。彼は道について次のようにいう。

聖賢の道を求むるや、以て人倫を明かにす。人倫を棄てて以て道を求むるは、則ち吾の所謂道にあらず。聖賢の心を存するや、其の孝弟の心を存するなり。(中略) 人、天地の間に生まるるや、只だ見在の身あり。夭壽貳わざるも、身を修めて以て之を俟つ。身存すれば則ち道存し、身没すれば則ち名存す。名存すれば道も亦た存す。(「輪廻論」『文集』卷二)

と。上文は「輪廻論」のなかで展開された議論であり、道そのものについて定義したものではないが、ここに見える道が人倫を指していることは疑いない。

彼のいう道が人倫の範疇に屬するものであるとすれば、道は歴史上の人々の生き様に具體的に示されるはずである。事實の直書をこそ歴史敘述の使命とし、そこから人のあるべき道を讀みとることを期待するとすれば、列傳は個々人のそのような事迹を客觀的に記録する場でもあったことになる。列傳に關しては彼獨自の歴史敘述の立場があり、

夫れ良史の職、善惡必書を主とす。但だ紀事をして悉く其の實に従わしむれば、則ち萬世の下、是非、自ら揜う能わず。奚庸ぞ別に褒貶の詞を爲さんや。（『續通志列傳總敘』『文集』卷一八）

といい、歴史敘述には眞實さえ記録すれば、事の是非善惡は自ら明らかにするはずであり、萬世の下、眞實の姿を伝えることこそが歴史敘述の使命であつて、個々の事象に主觀的な立場から價值判斷・評論を加える必要はないとする。

このような立場から『鄞縣志』でも細かい標目を立てることをやめ、人物傳のかたちを採つて敘述した。それは標目が個々の歴史家の主觀的な價值觀に依存するところ大であつたからである。

史家の例、列傳を以て重しとなす。其の儒林・文苑に列する者は皆な其の次なる者なり。（中略）愚意うに當に胡（渠・袁（桷）二志の例に循い、總て之を題して人物と曰い、但だ時代を以て次をなし、優劣を分たざるべし。既に古式に遵わば、又た爭端を息めん。古人を尙友するの識ある者は、自ら能く其の孰れか大賢たり孰れか小賢たるを別たん。（『鄞縣志局與同事書』『文集』卷三五）

郡志の名臣・儒林・文苑・清操・雋異・淳德の諸目、意は軒輊に存するも、終に公論に厭わず。羅端良の新安を志すや、但だ先達と稱し、潛説友の臨安を志すも、祇だ列傳と稱す。聞氏の舊志も亦た標目を立てず。今、其の例に循い人物を以て之を該ぬ。郷黨に自ら公評あれば、敢えては妄りに月旦を矜らず。（卷二二人物序）

という。客觀的な敘述に徹しさえすれば、敘述を通して歴史の實態は自ら明らかにするはずだというのが彼の持論であり、そのことを通して人倫の具體相をあきらかにし、道の開示をはかったのである。彼は歴史敘述における事實の直書に關連して、

愚謂らく、君、誠に有道ならば、何ぞ弑さるるに至らん。弑に遇う者は皆な無道の君なり。（中略）聖人の春秋を修むるや、王道を述べて以て後世を戒む。其の君をして有道の君たらしめ、心を正し身を修め、家を齊へ國を治め、各々其の所を得しむれば、又た何の亂臣賊子か之れ有らんや。（答問四）『文集』卷七）
ともいう。彼によれば、心を正し身を修め、王道に則つて家國を治める君主に亂臣賊子は無縁であり、弑逆に遭う君主は無道の君であつて、その死を特別の義例を用いて書き分ける必要など全然ないとする。

錢大昕は、一般には固陋な儒教倫理の信奉者と思われがちだが、上のような主張を展開するのを見れば、極めて柔軟な頭腦の持ち主であつたことがわかる。こうした柔軟性は女性に對する理解にも示されている。當時の正統儒學、朱子學では嫁した女性の行動に厳しい杵をはめ、その言動に忍従を強いた結果、悲惨な場合には、女性が夫の父母兄弟姉妹に、あるいは夫に虐待されて死亡することが數ばあり、そのような事態を見かねたのであろうか、

夫れ父子兄弟は天を以て合するものなり。夫婦は人を以て合するものなり。天を以て合する者は天地の間に逃るる所なし。而るに人を以て合する者は制するに去就の義を以てすべし。（中略）妻の夫における、其の初めは固より路人なり。室家の恩を以て之を聯ぬれば、其の情、親しみ易し。（中略）先儒、寡婦の再嫁を戒め、以て餓死の事は小、失節の事は大と爲す。予謂へらく、一女子の名を全うするは其の事小に、罪を父母兄弟に得るは其の事大なり、と。

故に父母兄弟は垂るべからざるも、妻は則ち去るべきなり。（答問五）『文集』卷八）
とまで主張し、女性に對する偏頗な束縛を解くよう提案している。先儒とはいふまでもなく程頤（伊川）を指し、人情を無視して守節を強調したことを批判しているのである。こうした女性に對する思いやりに基づいて記述したのが彼の列女傳であり、そこでは厳しい境遇を克服して家を守つた女性たちを顯彰している。

貞女節婦の、已に旌表を邀えし者は、俱に立傳するを得。更に身、窮約に處るも闡揚に力なく、行義灼然、衆の共に信ずる所の者あらば、亦た皆な兼録して以て苦節を慰む。（凡例）

とあり、こうした女性たちの生き様こそは人倫の模範とすべきものであり、後世に伝えなければならないと考えたのである。『鄞縣志』では零細な史料を多方面から収集して、巻数は一卷ながら数巻分の傳・記録を作成している。

三 『鄞縣志』の編修

上のような経過から錢大昕は閑性道の地方志を吟味し、それを批判的に繼承せざるを得ない立場に置かれることになった。まず錢大昕が心血を注いだのは『鄞縣志』の構成の體系化であり、天章・志・表・列傳・資料・雜識のかたちにとめている。上の註(14)に挙げた閑性道の地方志の綱目を錢大昕のものと比較すれば、その相異點は一目瞭然である。錢大昕の『鄞縣志』は、

(首) 序・凡例・圖、天章、(1) 建置沿革、(2) 城池、(3) 山川、(4) 水利、(5) 學校・公署、(6) 田賦・兵制、(7) 壇廟、(8) 職官、(9)・(10) 選舉、(11) 名宦、(12)・(17) 人物、(18) 孝義・藝術・寓賢、(19) 列女、(20) 仙釋、(21)・(22) 藝文、(23) 金石、(24) 古蹟・冢墓、(25) 寺觀、(26)・(27) 雜識、(28) 物產、(29) 土風、(30) 辨證・舊志源流

なる構成をとっている。兩者を比較すれば、閑性道の地方志がむしろ文學趣味に出、そのような觀點からまとめたものであったのに對して、錢大昕のそれは古典的傳統的な地方志編修法に則って綱目を立て、改めて地方志全體を再構成したものであることがわかる。この對比によっても錢氏の地方志が聞志のそれに大きな變更を加えたものであることが確認されるであろう。まず首卷に「天章」を置き、

國朝列聖相繼承、右文稽古、宸章奎畫、海內を炳耀す。(中略) 時に頒賜を蒙りたれば、謹んで天章を首卷に録し、以て守土の榮となす。(凡例)

とて、鄞縣に頒賜された列聖の言辭を謹録する場としている。いわば紀傳體史における紀に位置づけられるものである。以下、建置沿革、すなわち鄞縣の歴史から、城池、山川、學校・公署、田賦・兵制、壇廟など、鄞縣をとりまく自然環境

や鄞縣城内外の施設・古蹟を記述する。公署・賦税・戸口・兵制などに關しては、

公署・賦税・戸口・兵制の諸門は皆な公文・案牘に據り、亦た各條の下に某衙門來文・某科檔冊と注明し、以て徵信を憑す。(凡例)

とて、それぞれ記載の各條に典據を明らかにしている。また山川以下のそれぞれについて詠われた韻文、詩・詞あるいは散文、記、紀行文などを紹介して無味乾燥に陥りがちな敘述に文學的な潤いをもたせている。同時に舊志の敘述に含まれる誤った記載に對しては逐一論據をあげて批判し、正當な認識を提供しようとする。たとえば卷三山川の項では鄞江の源流について黃宗義『今水經』・齊召南『水道提綱』の二源説を否定して四明山を正源とする説を展開している。

また圖と表を充實させたことも特筆しなければならないであろう。

志の圖あること、人に眉目あるが如し。聞志には祇だ郡治・縣境の兩圖あるのみにして殊に未だ該備せず。今、按ずるに縣城は本府附郭たり、城内城外の水利は民生の利病に關係し、學宮は人士の觀瞻たり、海防は軍政の樞要たり。

(中略) 今、皆な圖して之を列し、觀者をして瞭かなること掌を指すが如くならしむ。(凡例)

とて、聞志の郡治・縣境の兩圖から一舉に十二圖を加えて、縣境・城池・縣署・學宮・分都・城中水利・四鄉水利・海防・四明山・東錢湖・月湖書院・天一閣・天童寺・阿育王寺圖など十四圖を整備し、概念圖ながらヴィジュアル面を充實させている。さらに同じく視覺に訴えるべく職官・選舉表などを三卷(卷八・九・一〇)にわたり作成している。職官・選舉表を用いたことについては、凡例で、

職官・選舉の姓名は俱に表に列す。(中略) 職官表は祇だ本縣の官師のみを載せ、統轄の大僚に及ばざるは縣志の體なり。

とて、記載内容を縣段階での官職・教授の敘述に限定すべきことを表明しているが、彼がその本領を發揮したのは卷八職官表であつたろう。彼によれば、

舊志の職官、頗る未だ備わらざるもの多し。謹んで正史に采り、參ずるに羣書を以てし、旁ら碑碣に及び、以て其の闕を補う。丞・尉以下に至つては、舊志、既に闕き、即ち近時の吏牘も亦た間々散失あり。今、其の知るべきものに據り表に列すと云う。(卷八職官表序)

とて苦心の作となつた。とくに明代に作成された元時の秩官表・職官表では蒙古の政治體制に對する認識不足もあつて、その官制の記載に不備や曖昧さがみられたが、彼は凡例で「職官表は祇だ本縣の官師のみを載せ、統轄の大僚に及ばざるは縣志の體なり」といい、また職官表序では、

元時、縣、亦た三等に分ち、鄆を上縣と爲す。達魯花赤一員、尹一員を設け、秩、皆な從六品とす。丞一員、主簿一員、尉一員、典史二員なり。

とて、縣達魯花赤・縣尹・丞・主簿・尉・巡檢からなる年表を作成して、それぞれの欄に固有名詞を書きこんだ。⁽²¹⁾これによつて鄆縣には長官に蒙古人、縣尹以下に漢人が、時には主簿や巡檢などにも蒙古人の配せられたことが一目瞭然となつた。おそらくこの年表は『元史稿』の著者ならではの片鱗を示したものといつてよいであらう。

列傳は、地方志を歴史敘述として位置づける錢大昕にとつて重要な地位を占めたから、卷一一から卷二〇まで、すなわち『鄆縣志』全體の三分の一を費やして敘述している。卷一一名宦傳ではこの地に赴任した王安石や曾鞏、程大昌などが、卷一二以下の人物傳ではたとえば(宋)王致や袁燮、史彌忠、王應麟以下、(清)萬斯同、全祖望、段秀林にいたる多數の人物が紹介されている。注目すべきは卷一六で多くの紙幅を費やして明末の國難に殉じた謝三賓や錢肅樂以下の殉難者を採録していることであらう。こうした扱いにも錢大昕なりの配慮をうかがうことができる。

彼は標目を立てて人物に優劣をつけることに慎重であつたから、多くは人物傳として敘述されたが、同じ趣旨は生存者の傳を立てないという原則にも示されている。すなわち、

人品の定論は必ず身後にあり。名宦・人物の見存する者は例、傳を立てず。(凡例)

とあり、客観的な敘述は死後により可能となるので、人物の月旦は後世の「郷黨の公評」に委ねる（人物傳序）というのが彼の立場であった。

『鄞縣志』にはこのような志本體に屬するもののほか、後世の地方志編修に備えて保存すべき史料をまとめた篇もある。羅端良の新安志、曾て金石の一門を立つ。明州に故と刺史裴徽・王密の二碑あり、李陽水の篆に出ず。又た韓擇木の開元寺碑・柳公權の金剛經あるも、今、皆な復た存せず。茲に其の見存する者に據り考えて之を録す。宋元以前は斷碑隻字も悉く録に著し、明碑は則ち其の文字の佳なるものを選ぶ。（凡例）

とて、金石關係の史料を保存する篇を設けている。また文學作品に關しても、

前人の題詠序記、業已に各門に散附す。陸士龍の書、王介甫の鄞縣經遊記、王伯厚の七觀、全紹衣の湖語、李杲堂・萬季野の竹枝詞の如きに至つては、皆な春容の大篇にして人口に傳誦せらるるも、以て一處に附見し難し。今、袁清容の例に依り彙めて一卷となし、土風を以て之に名づく。（凡例）

とて、『延祐四明志』の例に倣い、韻文・散文の鄞縣に關わるものを史料として保存すべく「土風」なる名目の篇を設けている。その外にも「雜識」なる題名の下にこれまで地方志に載せられなかった史料を項目別にまとめている。

これらはいわば史料集に相當するものであるが、いずれも後の地方志編修の便宜をはかつて編修・付加されている。當時の地方志編修者の中には、章學誠のように、これらの史料を志本體とは別に編修し史料集として並行させるものもあったが、錢大昕は『鄞縣志』の中に収めているのである。

地方志の再構成のほか、錢大昕がその精力を傾けたものに歴史事實の考證があげられる。聞性道は過去の地方志編修の經驗をもとに、敘述内容の充實を期して關連史料を手當たりしだいに收録したが、錢氏はそれらの中の不合理な敘述を逐一取り上げ批判している。こうした考證の成果の重要なものは「鄞縣志辨證」（卷三〇）にまとめられているが、その中から一例をあげれば、

聞志、王荆公の撰する所の鄞江先生墓志一篇を載す。文、最も蕪陋にして乃ち後人の偽造なり。其の尤も笑うべきは、張邵・張鄴・張祁の三人を以て從學の列に在らしめしことなり。三張は南渡の初めに仕えしかば、鄞江の歿を距ること七八十年なり。何に由て鄞江と相い識るや。（中略）荆公、豈に其の後人の貴顯たるを逆料して先に百年の前に貢諛するや。臨川集に本と此の文なく、前志も亦た未だ之れあらず。蓋し王氏の譜乗に出ざるならん。聞貢士、深攷せずして之を詳載するならん。何ぞ憤憤たるや。（鄞江墓志不足信）

とある。要するに『康熙鄞縣志』卷一二王致（鄞江）傳に、七八十年も後の人たちが直接、鄞江の教えを受けたとする墓誌を王安石が書いたという説をば、『臨川集』を點檢もせずに載せた杜撰を批判したものである。聞志を含め先行の當該地方志の不合理な記述は、この「鄞縣志辨證」以外にも、錢志の至る所で取り上げ、按語を付して批判している。⁽²⁴⁾

このように錢氏は聞氏の採集した記事を吟味する一方で、事象の採訪、記事の採録につとめ、志・表類や列傳を整備し、彼の長年の歴史研究の蘊蓄を傾けてこれを完成した。その成果は彼自身もいうように、

此の志の成るや、邑中の同志、互に相い商榷すと雖も、采訪も亦た勤む。之を聞性道の原本に較ぶるに、竊に謂らく、文減じて事増すならん、と。（凡例）

とて、編修協力者たちの努力を結集して聞志に多きを加え、「文簡にして事の豊かなる」『乾隆志』が完成したことを認めている。これは錢志が、方志の體例の整備により、唐宋以來の良史の條件、文章の簡潔と敘述内容の充實を達成したとの自負を示すものである。

四 同時代批判

錢大昕は自身の生きていた乾隆時代の鄞縣、あるいは乾隆時代についてどのような認識をもっていたのだろうか。そのことを民生面と軍事面、風俗面について見ることにしよう。まず前者に關しては、「田賦」門の序において清朝の賦税制

を明代のそれと比較しつつ、

（天・崇の際、軍興り加派すれば、民、命に堪えず、遂に土崩瓦解の勢を成す。）國朝定鼎の始め、盡く明季の額外の徵を除き、欽定賦役全書もて天下に頒行す。人丁は康熙五十年冊を以て常額と爲し、嗣後、滋生人丁、永に賦を加えず。雍正四年、復た丁賦を以て地糧に攤入すれば、民間に編審の擾なし。我が皇上御極以來、民依を軫念して地丁正賦を蠲免すること三たび、漕糧を蠲免すること再たび。深仁厚澤、海宇を漸被す。百姓、仁壽の域に生長すること、何ぞ其の幸なる。（卷六田賦序）

といい、明朝が酷税を課して土崩瓦解の形勢を醸成したのに對して、清朝は明末の額外の税を廢止しただけでなく、賦役全書を制定し、康熙五十年冊を基準にして課税することを定制度化。それ以後の増加分を免除したので、百姓の負擔は相對的に輕減した。そしてその後も雍正帝、乾隆帝による減免措置で人民は恩惠を被っているとし、人民が清朝の仁澤を享受するさまを贊美している。

他方、軍事面について見ると、兵制序に次のようにいう。

國朝定鼎の始め、浙東の遺頑、久しく靖んぜず。爰に大帥に命じて重兵を駐せしめ全省を控制す。城中に五營を設け、別に城守營を立て、星羅棋布すれば、隱然たる長城、今にいたるまで百有餘年、海濱に鳴吠の警なし。乃ち國家の經畫周詳にして、未雨綢繆の計、至つて深く且つ遠きを知る。（卷六兵制）

と。遺頑、すなわち明の遺臣の頑強な反清活動を鎮壓するために重兵を駐留配備し防備を固めた結果、浙江の海濱には百年来、騷擾・備警のことなく、安穩の状態が続いていることを指摘し、國家の經綸の周到さを稱贊している。

このような敘述からすれば、錢大昕は乾隆時代を正に歴史上の最も繁榮した時代、至高の盛世というように評價しているように見える。しかしながら各篇の序文における、上のような表現から彼がこの時代を手放しで稱贊・贊美していたと理解するのは正しくない。各篇の本文中ではそのような社會的經濟的繁榮や周密な防衛體制のもとにあって、さまざま

問題が伏在していることを指摘する。前者については「田賦」篇の末尾で、

案ずるに鄞邑の鱗冊、久しく失われ、小民控争するも、田地山場、稽核すべきなし。然れども查造せんとすれば、必ず履畝丈量を須い、滋擾し易し。姑く原編の字號を此に附し、以て善く經理を爲すを俟つ。

といい、この地方では既に土地制度が崩れており、それを立て直すべく嚴密な丈量を斷行すれば、社會に混亂をひき起す恐れがあるので、現状維持で將來に待つというのが實情であるとしている。また後者、すなわち兵制面に關しては、

案ずるに大嵩は濱海の要地にして、湯信公（和）の築城より以來、今にいたるまで四百餘年、日に就ち傾圮す。今、承平無事、海波揚らず、興築は急務にあらざるに似たれども、然ども城中、見に將士の駐守するあり。前代の防海の遺迹、具に存すれば、其の舊に因りて之を葺い以て金湯の固を壯にせん。險を設け民を衛ること、未だ輟て講ぜざるべからず。（卷六兵制海防）

といい、平和な状態がつづいている現在、さしあたり工事の必要はないように見えるが、城壁や海防機構が老朽化しており、その整備改修の必要であることを指摘している。これを見れば、兵制面も決して安固なものではなく、問題をかかえた外見上の安定であり、早急な改修と補強を必要とすることが知られよう。

そしてこの社會機構の中に生活する人民たちの生活様式についても錢大昕なりに歴史的に觀察している。鄞邑は浙江省東部の甬江上に開けた港町であり、その後背地を縣域とするが、はじめ明州府（宋）、ついで慶元府（南宋・元）、寧波府（明・清）の府治として發展した。とくに宋代以後、外國貿易が盛んとなるや、商業だけではなく、手工業も繁榮した。そのことは、

寧郡、海洋に切近したれば、海關を設立してより以來、外洋の諸貨、畢く集まり、居民、遂に摹仿して之を爲る。漆器の類の如き、洋製に及ばずと雖も、民間も亦た之に資りて利を爲す（嘉靖浙江通志）。（卷二八物産）

なる記述によっても裏づけられる。このような土地柄だけに、鄞縣では貨幣經濟の隆盛をうけて豊かな消費生活が営まれ

ていた。しかし風俗（卷二）の項を見ると、この町もはじめから貨幣經濟が盛んであったわけではなく、『嘉靖寧波府志』によると、かつては人々は農桑に親しみ、極めて醇朴で禮儀正しい、儒教の理想にかなった生活が営まれていたが、そのような風俗もその後、失われ、とくに明代後半には奢侈の流行により人々は、貯えを忘れて、文飾を競い消費生活を享樂するようになり、生活様式も儒教の理想から遠いものになってしまったとする⁽²⁶⁾。

錢大昕のこの地方の將來に對する展望が樂觀的でなかったことは最後の風俗批判に明らかである。彼は清代の歲時誌、年中行事について觸れ、「鄞邑の弊習に數端の亟に宜しく禁すべきものあり」として①火事場泥棒の流行、②貨幣經濟の盛んな土地柄特有の惡辣な商取引、③同じく浮き沈みの激しい土地柄を反映した無主の墳墓をめぐる犯罪行爲、④婦女の退廢的な生活を取り上げて、彼の個人的な見解を表明している。いまその二條を示すと、

一、泉貨輻輳の區、變詐百出し、奸商の客貨を潛蝕し陽りて耗歇すと爲すあり。黠徒、質劑を僞書し市錢を誑取するあり。甚しきは室に半文もなくして虛號を以て單を立て、輾轉相い售り、日を計りて重息を得べし。之を賣票と謂う。其の欺を受くる者、控訟して休まず。

一、城中の狹斜の巷、最も閭里多きは、頗る怪と爲さざるも、率ね顧名あり。然も籍を按ずるに逮治に勝えず。婦女の毎に靚妝して行道し、歲時もて結隊し寺廟に入り禮拜し、流連信宿、煽惑止めず、財を糜すのみに至るあり。

とあり、この地の惡辣で退廢的な社會現象をあげ、他の二條とともに、此れ皆な末流の類風にして治道に關るあれば、驟かに革む能わずと雖も、司土者の宜しく時に隨い禁戢すべき所なり。とて、その取り締まり方を提案している。

これらの風俗批判を見ると、風俗の頹廢は、單なる社會風俗面での、清朝の支配管理體制の弛緩現象であるにとどまらず、民生や軍事とも底流において繋がるところがあり、港町寧波・鄞縣のそれは内陸部の都市に先驅けて顯著化したものと見ることができる。

江南の一鄞縣におけるこれら支配管理体制の弛緩に對する指摘を見ると、錢大昕は乾隆時代の繁榮を、盤石の上に立つ繁榮ではなく、脆弱な基礎の上に立つ波瀾含みのそれであることを見抜いていたともいえよう。

餘 論——「鄞縣志」と「長興縣志」と——

歴史考證學者として一家をなし、一時は廣東學政として正統儒學を擁護する立場におかれた錢大昕も、やがて乾隆後期の特異な政治的環境の下で思想的轉換を迫られることになる。それは地方志の構成の上にも現れているように思われる。

錢大昕がかかわった三種の地方志の構成を比較して見ると、『熱河志』や『鄞縣志』では卷首に「天章」篇を置き、皇帝の當地に下した言辭を收録していたのに對して、『長興縣志』では、

(首) 凡例・圖・舊志源流、(1) 建置沿革・疆域、(2) 城池、(3) 公署、(4) 學校、(5) 兵防、(6) 田賦、(7) 戶口、(8) 山、(9) 水、(10) 壇廟、(11) 陵墓、(12) 古蹟、(13) 寺觀、(14) 風俗、(15) 物產、(16) 帝王、(17) 職官、(18) 選舉、(19) 名宦、(20) 人物、(21) 孝義、(22) 寓賢、(23) 列女、(24) 釋道、(25) 藝文、(26) 碑碣、(27) 雜識、(28) 辨證。

とし、首卷の天章篇を省き、代わりに『鄞縣志』では卷末に置いていた「舊志源流」を配していること、また「帝王」に關する項目は設けながらも記述を削除していることが注目される。錢大昕はかつて『熱河志』の冒頭に「天章」なる篇を設けて、皇帝の言辭を收録する場と位置づけ、『鄞縣志』でも聞志に缺けていた「天章」篇を敢えて設け、皇帝から鄞縣内に下された言辭を收録し、鄞縣が蒙った榮譽を記念碑的に記録する場にするとの意義づけをしていた。しかし最後の地方志『長興縣志』では「天章」なる篇は設けず、舊來、『長興縣志』に置かれていた「帝王」篇さえも削除している。そこには「天章」門を設けなかった理由についての説明はなく、『舊志源流』が「天章」門の缺を補うかたちとなっている。また舊來、置かれていた帝王篇を削除した理由については、凡例で、

舊志に帝王の一門ありて、人物の前に列す。蓋し陳帝、世々茲の土に居り、故宅の在るを以てなり。故に顧尚書、此

の例を翹立し、而して後來、之に因る。攷るに史能之の毘陵志、齊梁本紀を述べず、潛説友の臨安志も吳越世家を敘せざるは、良に一代の興亡の一邑の掌故に關わるなく、義に各々當るあるを以ての故ならん。況んや表ありて又た紀あれば、亦た重複を嫌すにおいておや。今、諸帝の世系及び歴試の事迹、卽位・改元の年月、廟諡を以て具さに表に載せ、而して帝紀諸王の傳を立てざるは、體例において允協たるに似たり。

といい、『毘陵志』や『臨安志』で本紀・世家を置いていないのに範をとり、一代の興亡と一邑の掌故とは無關係なのだから、地方志に「帝王」門などはないのが正しいのだとしている。ここでは「帝王」の一門を置いたのは顧應祥の創案とし、その削除を史能之と潛説友の範にならうとしているが、『鄞縣志』では聞志の體例を變更してまで「天章」の一門を設け帝王の言辭を收録していたことからすれば、「天章」篇なり「帝王」門の削除は彼の方法論の變化と見なければならぬだろう。ちなみに同時期の地方志家、章學誠は地方志を紀傳體で編修し、帝紀に相當するものとして「皇言紀」を置いていた。⁽²⁷⁾ 錢大昕も名は異なるが、『熱河志』や『鄞縣志』の「天章」篇では帝王の言辭を收録していたから皇言紀と同じ性格のものと考えていたことは間違いない。

ではなぜ『長興縣志』において前二書と異なる構成を敢えて採用したのか。そこには錢大昕の清朝に對する心情的立場の變化が反映しているように見える。錢大昕の清朝あるいは皇帝に對する立場は乾隆四十年頃を境に變化したものである。父の喪を契機に官途を退き、郷里の近くで書院の主講や院長として地方の教育に従事しはじめ頃から乾隆帝の政治姿勢に對して次第に失望し不滿を懷くようになったと考えられる。

『四庫全書』の編纂をめぐって吹き荒れた禁毀と文字の獄では、中國の貴重な文獻の多くが葬られただけではない。乾隆帝は南巡のたびに蘇州を訪れ、蘇州を訪れると必ず紫陽書院に立ち寄っていたが、四十九年の訪問の際にはかつて院長であった師の沈德潛（封典）をば、徐述夔（筆禍處分）の傳記を書いた廉で、賢良祠から撤去したことは彼に大きな衝撃を与えたに違いない。五十三年に自らがその院長となるに及んで、その無念さは一層、つのつたことと思われる。加えて皇

帝への信頼を揺るがせたのは尹壯圖への彈壓であつたろう。錢大昕の科舉同年の親友で、かつ（五十二年には）その墓誌銘を書いた尹均の子息、尹壯圖が寵臣和珅の糾弾を視野にいれて諫言を試み、却つて乾隆帝の執拗な反駁・追及を受けて天下のさらし者にされたことは、彼の皇帝に對する尊敬の念を喪失させるに十分であつた。彼の「梁武帝論」（『文集』卷二）が、諫言を受容せず、却つて反駁を加えて滅亡の道を歩んだ梁の武帝を批判し、そのことを通して乾隆帝を批判したものであることは今日では定論になっている⁽³¹⁾。

かつては乾隆帝に見出され、その寵を受けた錢大昕が晩年になって禁忌にも觸れかねない論文や記事を遺したのはそれだけこれらの事件が彼にとって如何に耐え難いものであつたかを示しているように思われる。⁽³³⁾『長興縣志』における「天章」篇の削除もむしろそうした彼の心境上の變化を反映したものと見るべきであろう。

* * * * *

錢大昕は多年の歴史研究・地方志研究を土臺にして『鄞縣志』と『長興縣志』を編修した。なかんずく『鄞縣志』は數ある地方志のなかの名著とされ、一時は地方志の模範とされていた。⁽³⁴⁾しかし激動の外患内憂をへて知識人の世界觀・價值觀が變化した同治・光緒年間には過去の事業・業績にも比較的客觀的冷靜に對應できる風潮が生まれていた。そのような風潮のなかで錢大昕の業績も批判的に見直されることになる。張恕「光緒鄞縣志」の凡例をみると、錢大昕の立てた體例の大枠は尊重するものの、その考證の誤りや採訪・史料収集の不十分なところが指摘されている。⁽³⁵⁾

錢大昕は、朱子學の盛んな世相を慮ばかつてか、『鄞縣志』卷二七雜識三で、僞學の禁により朱熹らを彈壓した韓侂胄の側近、高文虎・高似孫父子の史料を集め、高似孫を『經略』・『史略』・『子略』・『集略』・『緯略』・『疏寮小集』・『鄞錄』の著者として紹介するにすぎなかったが、後の『光緒鄞縣志』はこの史料をもとに高文虎父子の詳細な傳を立てている。また「雜識一」では日本に關するかなり詳細な記事を集めてはいるが、あくまでも雜識として記録していたにすぎない。しかし「光緒志」はその史料をもとに外國傳を立て、日本を筆頭に高麗、閩婆、（中略）英吉利、佛蘭西、彌利堅、西班牙

牙葡萄牙、荷蘭、布路斯などの國々を紹介している。これらのことから『光緒志』は『乾隆志』の問題意識を具體化し發展させたものと評價することができる。錢大昕自身、何らかの問題意識は懷きながらも明確化・具體化できないままに遺した記事史料をば、張恕らは國際情勢や世相の變化の下、それぞれ歴史像として具體化し歴史事象に仕立てているからである。このように見てくると、清朝の絶頂期に著された錢志は、一面では清朝の太平を謳歌すると同時に、他面では内部にはらむさまざまな矛盾的要素を彼なりに意識的にとらえ、あるいは無意識に提示した歴史敘述として評價することができよう。

ともあれ『乾隆鄆縣志』は錢大昕が心血を注いで取り組んだ歴史敘述である。清朝の全盛期に、正統儒學、朱子學の風靡の下で著されたという時代性は免れがたいにせよ、宋代以來の地方志を徹底的に研究して模範的な體例を作り、加えて乾嘉の考證學全盛のなかで培った歴史考證學の方法を驅使して歴史事實を洗い直し、より正確な歴史像を後世に遺した功績は評價されるべきであろう。

註

- (1) 黃燕生「清代方志的編修、類型和特點」(『史學史研究』一九九〇年第四期)。
- (2) 倉修良「清代方志編修狀況」(『方志學通論(修訂本)』方志出版社、二〇〇三年、第二章第五節一)。
- (3) 張承宗「清代的元史研究」(『史學史研究』一九九二年第四期)、顧吉辰「錢大昕與《元史稿》下落」(『錢大昕研究』華東理工大學出版社、一九九六年)、陳其泰「錢大昕與元史學」(『史學與民族精神』學苑出版社、一九九九年)。
- (4) 『嘉定縣志』(陸懋宗修、光緒二年)卷一六官蹟の錢大昕の條には、
大昕初以詞章名、文法歐曾、詩宗劉白。既乃潛研經史、凡文字音韻訓詁、歷代典章・制度・官制・氏族・年齒・古今地理沿革・金石・畫像・篆隸、及古九章算術・今中西歷法、無不洞悉。
と見え、その學問領域の廣袤と深奥を一言でまとめている。
- (5) 『四庫全書』所收の『欽定熱河志』一二〇卷は和珅・梁國治奉敕撰となっているが、總纂官にかつて錢大昕とともに編修に當つた紀昀の名が見えており、實質的には彼の

主導で改修が進められたものと思われる。

- (6) 『長興縣志』への錢大昕の關與については邢澍「修長興縣志序」(『守雅堂稿輯存』卷一)に、

于壬戌之歲、始延嘉定宮詹錢辛楣先生至署、稽舊之失、汰舊之繁、增舊之闕、訂舊之訛。余每見先生口講指畫、不憚精詳。常與余商論、或秉燭至午夜、由是體例門類舉邑志而更新之、而是書頓爲改觀。其戊辰以後、續修諸條、則宮詹之弟徵君可廬先生所手定。徵君常造余署、與辛楣先生先後館邑之鑑止亭、參鄉評、慎去取。

と見える。これによれば、編修の基本方針や體例など重要な部分については始どが錢大昕と邢澍によって決定され、舊志の批判的檢討と新志の凡例および各篇の序、按語、「辨證」、「舊志源流」をふくむ大半は彼の手に成るものと考えられる。

- 洪煥椿『浙江方志考』(浙江人民出版社、一九八四年)一五二頁。

- (7) 倉修良「方志發展的三階段、附表二」(『方志學通論』前掲)。

- (8) 黃燕生「清代方志的編修、類型和特點」(前掲)、吳豐培・李藁「中國地方志編目中遇到的若干問題和釋例」(『中國地方史志論叢』中華書局、一九八四年)參照。

- (9) ただし私的な編修にかかる鈔本があったことは洪煥椿『浙江方志考』(前掲)の著録によって知られるが、恐らく錢大昕らの認識になかったものと思われる。

- (10) 編修に際しては志局のメンバーが史料の採訪に努めたは

か、當時、天一閣と並ぶ藏書量を誇った盧址の抱經樓などは、

志局初開、盡出插架善本、以供檢閱、文獻之徵、實有賴焉。(凡例)

とて、積極的に藏書を編修に提供したことが特記されている。また參校兼採訪の一人、鄞縣の范永祺も積極的に編修に協力したらしく、

君又熟於鄉邦文獻、予纂鄞志、數就君咨訪、傾困出之無倦色、古所謂直諒多聞之友、君殆兼有之。(孝廉范君墓誌銘)『文集』卷四六

とある。永祺は天一閣の范氏らしく、その藏書の閲覽に便宜をはかったように見える。

- (11) 吳晗『江浙藏書家史略』(中華書局、一九八一年)、顧志興『浙江藏書家藏書樓』(浙江人民出版社、一九八七年)九八・一九八頁。

- (12) 『錢竹汀居士年譜』を參照。

- (13) 聞性道の事迹は『乾隆鄞縣志』卷一七人物傳に、聞性道、字天廼、(中略)順治八年、大兵平舟山、張肯堂閩門殉節。性道、訪得其骸骨(中略)瘞諸茶山。康熙十七年召舉博學宏詞、巡道許宏勳將以性道應、力辭。とあり、また『光緒鄞縣志』卷四一にはさらに詳細に、

性道、嘗修甯波府志、林時躍・高宇泰皆極賞之。縣令汪源澤延修縣志。

という。これらによれば、彼はかつて従事した『寧波府志』(康熙十二年完成、未刊)編修の經驗をふまえて『鄞

縣志』の編修に取り組んだものらしい。ただしその出来映えも評價もあまり芳しくなく、

國朝康熙初、邑人聞、性道樸修、頗爲詳備、而拙於文詞、未爲通人所許。(陳鍾琛序)

聞志文雖冗蕪、然事蹟亦有必不可削者。錢志竟襲曹志舊文、有減無增、是又矯聞志而失之太略者也。(『光緒鄞縣志』卷二五名宦、陳紀傳案文)

とされるに至っている。

(14) ちなみに聞志の構成の詳細は、

(卷首) 郡治圖・縣境圖・十二攷序、(1)總識攷(沿革・星野・風土・疆域)、(2)經制攷(一城郭・坊巷・鄉里・都隅坐地圖・田地分定字號・市・鎮・村、二學校・公署・郵舍、三賦役・兵制)、(3)形勝攷(一山・巖・壑・嶼・洞・阮・塾・石、二海・江・湖・溪・天封塔・海曙樓・慶雲樓)、(4)利濟攷(東錢湖・廣德湖・溪・灣・浦・波・龍潭・河渠・橋・泉・井・池・硤・閘・堰・塘・道頭・水步・三喉・水則)、(5)治化攷(職官・名宦傳)、(6)敬仰攷(壇・廟・祠)、(7)選舉攷(一進士、二舉人・明經・薦舉・任子)、(8)品行攷(一周賢傳・漢賢傳・唐賢傳・宋賢傳、二宋賢傳・元賢傳、三四五明賢傳・六明賢傳・昭代賢傳、七孝友傳・德義傳、八列女傳節孝・賢母・閭秀)、(9)修辭攷(著述)、(10)特藝攷(技術)、(11)方外攷(一佛寺、二佛庵・道觀・釋氏・羽流)、(12)雜記攷(一古蹟・遺事、二第宅・塚墓・物產・祥祲)。というものであった。

(15) この点については『長興縣志』序に

余惟今之志乘、即古列國之史也。古者列國、皆有史以記事、其人類皆生其水土、習其民風、知其方俗、而又世守厥官以時修之。故周禮外史、掌四方之志、土訓掌道地圖、誦訓掌道方志、上足備王朝之采擇、下足徵一邦之文獻焉。後世郡縣之史無專官而長民者復數年而易、甚或一年一易、數月一易、久居其任者鮮矣。由是非循良之吏、悉心民瘼、惓惓於一方之掌故、徃々不能成書即成矣。(『長興縣志』序)

と見える。この序文は湖州府知事善慶のものだが、その主張は錢大昕の見解を承けたものであろう。

(16) 拙稿「袁桷と『延祐四明志』」(『人文論究』第五二卷第二號、二〇〇二年)。

(17) 同じ認識は章學誠にも、國史方志、皆春秋之流別也。(『方志立三書議』『章氏遺書』卷一四)。

且有天下之史、有一國之史。(中略) 部府縣志、一國之史也。(『州縣請立志科議』同上)。

とあり、兩者は相似た見解をもっていたことが知られる。

章學誠は錢大昕を尊敬・信頼し、

當時中朝薦紳負重望者、大興朱氏・嘉定錢氏、實爲一時巨擘。(中略) 許爲乾隆學者第一人也。(『答邵二雲書』『章氏遺書』補遺續)

出都以來、頗事著述、斟酌藝林、作爲文史通義。書雖未成、大指已見辛楣先生候牘所錄內篇三首、并以附呈。

〔候國子司業朱春浦先生書〕『章氏遺書』卷二二

とて、乾隆三十七年に著述を志した時點から内密に草稿を送って意見を求めており、兩者の交流は長く續いている。このような交流から見ると、地方志・歴史學に關する立場と認識を共有していたものと考えられる。

(18) 仁井田陞「中國農村の離婚法慣習」(『中國の農村家族』東京大學出版會、一九五二年)。

(19) たとえば湯淺幸孫「シナに於ける貞節觀念の變遷」(『中國倫理思想の研究』同朋舍、一九八一年)一五五頁以下、胡發貴「清代貞節觀念述論」(『清史研究集』第七輯、一九九〇年)などを參照。

(20) 『一程遺書』(卷二下、程伊川)、『近思錄』卷六。

(21) 期間を示す「至元至皇慶」欄には、

袁清容志(延祐四明志)所載各官俱無莅任年月、張東沙(嘉靖寧波府志)俱列之至元朝太覺鹵莽。今以延祐三年石刻爲斷。其前諸人不別言何朝、以示闕疑之意。間有可致者、仍附注於下。

といい、石刻史料を利用して作成したことを明らかにしている。

(22) たとえば延祐年間の欄には縣達魯花赤・縣尹・丞・主簿・尉・巡檢にそれぞれ亦思馬因、許庭芝、張士元、脫思忽不花が、泰定年間の欄には完者禿、阮申之、王世安、楊宜祖、(不詳)、察罕不花の任命されたことが記載されている。

(23) 拙稿「章學誠の地方志編修と方志學」(『人文論究』第五

三卷第二號、二〇〇三年)。

(24) たとえば、卷七壇廟には「白馬廟、縣治の西南、河利橋の東にあり。舊時の織染局なり」とあり、按語を付して、

按聞志引韓詩外傳、謂馬影與練光等、所以織局祀白馬神、非也。周官蠶無專司、禁原蠶掌於馬質、蠶爲龍精、與馬同氣、織局設祀、義或取此。至謂有神人乘白馬指揮而織染純正、益不足爲據。

と、白馬廟命名の俗説を批判している。

(25) 『嘉靖寧波府志』からの引用文には、

寧波之俗、農狎於野、婦勤蠶織、商賈鬻魚鹽、工供日用、絕無四方奇袤之物。男子戴平定巾、女子堆笄、皆衣布素服。卽高質厚藏、不被綺繡。婚冠一從簡朴、僅取成禮。賓至則擲蔬炊糲以爲餉。最其隆敬者、乃有雞豕鱉魚、率不過四簋、或五六簋、或七八簋而已。女子不出戶、出則男女別於途。少者見長者、卽肅肅長揖、屏息道側。隣里不相侵竊、外戶闔而不扃、青衿之士、亦皆升於菲陋、不差韋垢。昏旦閉戶、誦讀絕鮮。(卷一風俗)

と見える。

(26) 同じく『嘉靖寧波府志』からの引用文には、

比年以來、漸競文飾、務雕鏤薄布素賓筵珍美、至割衣食、而婚嫁之具、或移業產之半、居喪集弔客、極體薦肴蒸以爲盡志、而導殯復裝束綺繡、行以梨園歌舞、參於哭泣、遊屢富於擗踊。其又甚則入無飯石之儲、出衣華繡之服。昔人所譏、今乃快之矣。少不遜長、而興盡交於途、親戚相暴、隣里相盜、攻告計以迂官府。其士人亦有罷誦讀、

而甘佚遊、恥惡衣而不恥枵腹、至傅先生長者以爲無聞知。回視昔日之質行、何如哉。(卷一風俗)と見える。

(27) 拙稿「章學誠の地方志編修と方志學」(前掲)。

(28) 紫陽書院は北宋の景祐二(一〇三五)年に蘇州知事、范仲淹が五代吳越の錢氏の南園跡に設立した州學(のち府學)に、康熙五十二年、併設された教育機關であり、乾隆帝は六度(十六年・二十二年・二十七年・三十年・四十五年・四十九年)の南巡のたびに立ち寄ったとされる(馮桂芬『蘇州府志』光緒七年、卷二・三巡幸)。

(29) 張傑『《四庫全書》與文字獄』(『清史研究』一九九七年第一期)。

(30) 牟潤孫「錢大昕著述中論政微言」(『注史齋叢稿』中華書局、一九八五年)。

(31) 「梁武帝論」は乾隆五十五年の尹壯圖の諫言に對する乾隆帝の執拗な反駁と處分に對して執筆されたとして、錢大昕は五十三年に壯圖の依頼を受けてその父の墓誌銘を書いているから、この事件に強い關心をもち、壯圖の無慘な結果について同情すると同時に、乾隆帝の仕打ちに失望と憤りを感じたに違いない。その想いは司馬光が試みたのと同じ梁武帝批判というかたちで文章化されたのであろう。同じ趣旨の諫言論が『養新錄』卷一八臣道と『養新餘錄』卷下帝王大度に繰り返し論じられているところを見ても乾隆帝の反撃にいかに強い遺憾の意を懷いていたかが理解されるよう。

(32) 錢大昕が乾隆帝に格別の恩義を感じていたことは次の文章からもうかがえる。

臣本諸生、困於場屋、蒙聖主特達之知、收之格外。洎成進士、屢忝司衡、兩校禮闈、四典鄉試。(『河南鄉試錄序』「文集」卷三三)

(33) 禁忌にも觸れかねない言説を取えて『文集』などに收録公表した時代的背景としては嘉慶四年正月の乾隆帝(太上皇)の崩御をうけて、嘉慶帝が和珅に自盡を命じ、尹壯圖を改めて召命するとともに、再三にわたり上諭を以て内外に言路を廣開することを表明し、封事、すなわち私的な獻言を獎勵したこと、今日いうところの言論統制の緩和を指示したことが挙げられる(『仁宗實錄』卷三七以下至卷五六)。

(34) 黃華(主編)『中國地方志詞典』(黃山書社、一九八六年)の乾隆鄞縣志・錢大昕の項を参照。

(35) 新修鄞縣志凡例には、

一、錢志徵引舊籍、間有竄改、失其本意、或原無此文而隨手填注、或語出彼書而妄注此目。今、各查取本書、一々核正。

一、錢志所收碑記之類、以諸家遺集宋元明舊志及石刻拓本校之、多有舛誤、今俱改正。發凡於此、每篇下不復注也。

一、錢志人物傳不立標目、此例最善。其別立孝義一門、則無謂也。

などに見える。ただし最後のものは聞志を承けて、孝友傳

や徳義傳の項目を残しており、そのことが體例矛盾として

批判されているのである。

of the Mongol period themselves.

QIAN DAXIN'S LOCAL HISTORY, THE *QIANLONG YINXIANZHI*

INABA Ichirô

Evidential studies 考證學, a philological approach to the historical record, was a discipline characteristic of the learning of the Qing Dynasty, but it should also be noted that the age was also a period when the compilation of local histories was extremely popular.

Qian Daxin 錢大昕 has been recognized as the most prominent of those involved in evidential studies, but his *Yuanshikao* 元史稿 was never completed and his reputation as a historian is not as high as it might have been. Nevertheless, as he treated local history as historical narrative, by examining the local histories that he compiled, it is still possible to appreciate his acuity as a historian. In this article, I consider his role as a historian through an analysis of the *Qianlong Yinxianzhi* 乾隆鄞縣志, a local history, which he had compiled.

Qian Daxin was involved in compiling three local histories in his lifetime, the *Rehezhi* 熱河志, the *Yinxianzhi*, and the *Changxingxianzhi* 長興縣志. Because his first effort, the *Rehezhi*, was from his early days as an official and scholar, it can be surmised that it was compiled in accordance with tradition. However, it was impetus for reading through numerous local histories and establishing his own style, and also for his building a collection of historical evidence.

The *Yinxianzhi* was compiled after Qian had retired from the bureaucracy and become the director of the Academy 書院 in the fifty-third year of the Qianlong era on the request of his intimate friend Qian Weiqiao 錢維喬, the governor of Yinxian. This local history is characterized on one hand by Qian's thorough examination of the *Kangxi Yinxianzhi* 康熙鄞縣志, compiled one hundred years earlier by Wen Xingdao 聞性道, an examination in which Qian applied the philological techniques of evidential studies to each description, indicating original sources, and also adding descriptions of events which he assembled himself, while on the other hand he organized the whole structure following the classical form. While the narrative praises Qing policy in the preface to each section of the work, the main body of the work elucidates historical reality, pointing out social contradictions behind the present prosperity and the weakness of the foundations to arouse the attention of politic leaders.

A change in Qian's intellectual position can be seen in the fact that he eliminated from the *Changxingxianzhi* the chapter on the *Heavenly Phenomena* 天章篇, which had appeared in his first two local histories.

The efforts of Qian Daxin as practitioner of evidential studies are esteemed in certain circles within the academic world, but there is a tendency to see him as scholar without a sense of statecraft reality and as rigid and narrow-minded. However, his advocacy of statecraft is revealed through the narrative of his local histories.